



# 五小だより



五小ブログ

五小ボランティア

12月号

令和5年11月30日

国分寺市立第五小学校

校長 橋本 弥記

学校教育目標 ○元気な子 ○やりとげる子 ◎考える子 ○思いやりのある子

## 小春の日々

校長 橋本 弥記

先生と話して居れば小春かな

寺田 寅彦

物理学者である寺田 寅彦は、熊本の高等学校の出身で、そこで2人の先生に出会います。1人が彼を物理学の世界に導いた田丸卓郎で、もう1人が英語教師であった夏目 金之助、後の夏目 漱石で、この句の「先生」は漱石のことです。

漱石には多くの門弟がいましたが、最古参と言える寺田 寅彦は、対等な友人に近い存在となり、「吾輩は猫である」「三四郎」の登場人物のモデルであるとも言われています。夏目 漱石も寺田 寅彦もそれぞれの分野でのプロフェッショナルとして敬意を持ち合い、親交は長く続きました。

そして「小春」とは、初冬の今頃の時期の穏やかな春のように暖かい日々の様子のことです。「小春日和」という言い方で使われることが多いです。春を表す言葉ではありませんが、この句からはのどかさや心あたたまる喜びが伝わってきます。

学校や先生には厳しい目を注がれがちな時代であるようですが、児童・生徒が先生と話して小春日和のような気持ちになれるなら、それは望ましいことだと思います。

その一方で、大人や友達との距離感を適切にとらせる指導を行うことも、先生たちや学校に求められています。人と人が対等・平等であることも、年齢が上の人への敬語等についても指導しています。

全てがそうとは言えませんが、かつてのテレビドラマでは先生が生徒をぶん殴っていても、見る側の感覚に抵抗感が薄かったかもしれません。昨今では叱責の仕方として、どこまでが当事者たちの安全を守るためにやむを得ないことで、どこからが体罰になるかを先生たちが学んだり、定期的な体罰調査を行ったりします。しかし、話して小春のような気持ちになる人間関係を築けるとしたら、響くのは形からではないところだと思います。

11月は「ふれあい月間」で、本校でもいじめ調査に伴う児童・生徒への聞き取りを行いました。トラブルの解決と一緒に当たる先生や、何回でも根気強く話を聞き、保護者への報告も怠らずずっと案じてくれている先生との信頼関係の上に、日頃からの和むやりとりがあり、心がつながっていくのだと思います。帰りの会が終わっても一向に帰らず、先生と雑談をしていたがる子どもの姿は、どの学年でも見かけます。「この間、叱られたから先生は嫌いだ」と言う子もいますが、それでも見放すことも諦めることもせず「仕事だから」で済ませない何かを期待されるのが「先生」です。働き方改革の枠に収まらないところに小春があるとしたら、それはそれで校長としては悩ましいですが。

60周年記念式典の書道パフォーマンスで、6年生が書いた文字が「大切」でした。大切にしよう、尊重しよう気持ちから、何十年後も何百年後にも小春を育てていく子どもたちと先生の学び舎としての学校であろうとする宣言でもあります。今年度残り4か月、それぞれの学級・学年で育てている小春を、ご家庭や地域でも見守っていただければと思います。

※周年行事に際してのご協力と、当日のお手伝いをしてくださった皆様に、御礼申し上げます。ありがとうございました。